

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24242001

研究課題名(和文) 知のエコロジカル・ターン：人間的環境回復のための生態学的現象学

研究課題名(英文) An ecological turn of knowledge: an ecological phenomenology for the restoration of human environment

研究代表者

河野 哲也 (KONO, Tetsuya)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60384715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 40,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、J・J・ギブソンの生態心理学と現象学とを融合させた生態学的現象学を理論的中核として、人間のあらゆる活動を身体と環境との循環的相互作用のなかで理解し、人間環境についての総合科学の基礎づけを目的とした。5年間で、従来の心の科学では注目されていなかった中規模生活圏の構築に焦点をあて、どのような人間環境を(再)構築すれば、人間と自然の双方にとって最適なものとなるかを探求することができた。研究成果に示したように、国内外の様々な領域の研究者が協働し、著作・論文・学会発表・シンポジウム・ワークショップ、講演会などの多数の業績を上げることができ、環境の実証的現象学という新分野の形成に大きく貢献した。

研究成果の概要(英文)：This research aims at understanding from the viewpoint of the ecological phenomenology all human activity as circulative interactions between body-subject and the environment and trying to establish philosophical and theoretical ground for a comprehensive human environmental science. We have focused on the issue of how to construct a middle-scale human environment that is suitable for human wellbeing and environmental sustainability. During our 5 years research, we have achieved many splendid results, for examples a series of anthology, papers, presentations, symposiums, workshops, and invited lectures, as shown in "study results" and largely contributed to the formation of a new field of positivistic phenomenology of the environment.

研究分野：哲学

キーワード：生態学的現象学 生態心理学 アフォーダンス 身体 技術 倫理 環境 促進行為場

### 1. 研究開始当初の背景

環境問題は、21世紀の全人類的な課題であるが、2011年3月の東日本大震災以降、あらためて日本人のみならず全人類的な緊急課題として私たちに立ちをはかっている。

人間存在の基本構造は、「人間環境-内-存在」にある。人間環境とは、人工物によって形象化され、社会制度によって維持・制御され、人間関係が展開されているところの物理的環境である。人間はその存在の基本構造から、環境を改変し構造化せざるを得ない。

しかし、環境の改変や構造化が進むにつれ、「人間環境-内-存在」の限界が露呈し、その外部としての自然環境を意識せざるを得なくなる。私たちは震災によってそのことを思い知らされた。こうした環境との良好な関係構築への関心が、本研究の研究背景である。

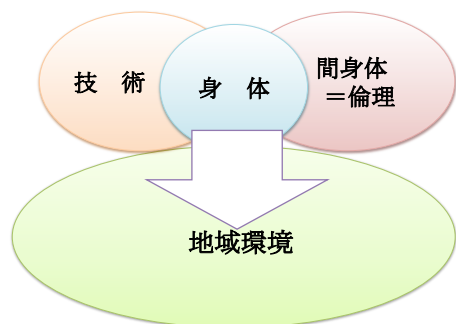
### 2. 研究の目的

本研究の目的は、中規模の人間環境のなかでの人間のあり方を具体的に描き出すメゾ・レベルの分析をとおして、人間と環境との関係を、哲学的・倫理的レベルで具体的に考え直すことである。つまり、人間環境における物（自然/人工物）、人、社会制度の相互作用を生態学的現象学の観点から分析し、どのような人間環境を(再)構築すれば、人間と自然の双方にとって最適なものとなるかを探求することである。

ここで実現されるべき人間環境とは、人間と自然双方にとっての持続可能性を考慮しながら、双方の回復力と脆弱性に配慮がなされ、双方が相互の変化に対して柔軟に対応でき（適応可能性）、人間のケイパビリティと生命の在り方の多様性をはぐくむ環境、すなわち、環境への配慮と人間福祉の両方に関わる諸価値を実現するような環境である。

### 3. 研究の方法

本研究は、その主要な目的を達成するために、三つのテーマ、(1) 身体：環境とのエンカウンター、(2) 技術：身体を取り囲む人工環境、(3) 倫理：人類のアフォーダンスに分かれて研究を遂行しながら、同時に各部門を体系的に連携させ、最終的に(4) 人間的環境の再興：自然/人工の二分法の超克を目指した「人間環境デザイン学」へと発展させる。



(1) 第一部門「身体：環境とのエンカウンター」では、人間の身体とその環境内での運動に関して生態心理学的な二つの観点から実証的な解明を目指す。ひとつは、身体運動についてのシステム論的理解であり、もうひとつは身体に制御を与えている生態学的情報を扱い、運動制御に関わる情報研究である。そして、これら二つの実証的研究が、心の哲学、存在論、システム論、認知科学、運動学、発達心理学などの多様な学問分野にどのような可能性を与えうるかを示し、環境とその中で生活する存在者の意味を明らかにする。

(2) 第二部門「技術：身体を取り囲む人工環境」では、身体・技術・環境の関係のあり方を空間、運動、そして道具の使用と制作という観点から解明する。環境についての知覚と運動に関する生態学的現象学の観点からの成果をもとに、具体的な道具の使用と設計に関するヒントを獲得する。

(3) 第三部門「倫理：人類のアフォーダンス」では、人間性の定義となるところの人間同士の社会的関係性、すなわち、意思伝達、制度、文化、政治などに関わる人間関係についてギブソニアン立場から分析し、人間同士の善き環境の構築法を構想する。

(4) 第四部門「人間的環境の再興：自然/人工の二分法の超克」は、第一部門から第三部門の各研究が、実際の地域における生活環境の構築の現場でどのような有効性を持ちうるかを総合的に検討する。研究分担者・連携協力者・研究協力者のすべてが関わる共通部門であり、次の三つの側面から探求される。

①哲学的側面：哲学の観点から第一～第三部門で実現しようとする価値（安全性、回復力、脆弱性、適応可能性、ケイパビリティ、多様性）が人間的環境の中でもつ相互の関連性と位置づけを明確化する。②実証的側面：生態心理学の立場から地域環境構築を心理学的テーマとして扱う方法と概念、必要となる財や機関の検討を行う。③倫理・制度的側面：政治、経済、福祉政策の観点から、地域構築を可能にする制度と経済基盤を考察する。

### 4. 研究成果

(1) 初年度は次の共同研究の成果を上げた。

①アンソロジー『知のエコロジカルターン』

(3巻、編者：村田、佐々木、河野、染谷、東京大学出版会)の出版に向け、5回の集中研究会を行い、相互に提出原稿の検討をした。②M-B エーマン氏(ウプサラ大学)とH. ヘフト氏(デニソン大学)とを招聘し、それぞれフェミニズム科学技術論とギブソン心理学の哲学的基礎の講演会を複数回行った。

③海外機関との連携シンポジウムとして、2013年3月にウプサラ大学ジェンダー研究所で、ジェンダーと身体性、科学技術をテーマとしたシンポジウムを4日間行った。

④国内では2012年9月11日には、話題提供者として大野隆造氏（東工大学）、鈴木毅氏（大阪大）を招聘し、日本心理学会第76回大会でラウンドテーブル「建築と居住空間の生態心理学」を実施した。3月には拡張した心論の例会報告をした。

⑤フィールド調査として、桑子は佐渡島でトキ保護など生態系改善活動を長年行っており、河野も参加して今後の本研究の方向性を探った。川内は東日本大震災の仮設住宅に関する調査を行った。

⑥情報発信のために、ホームページ（<http://ep.human.waseda.ac.jp/groups/coex/>）の作成を行った。

(2) 二年度は次の共同研究の成果を上げた。

①アンソロジー『知の生態学的転回』シリーズ（編者：村田、佐々木、河野、染谷）を、第1巻「身体」を5月に、第2巻「技術」を7月に、第3巻「倫理」を9月に、それぞれ東京大学出版会から刊行した。

②9月に文化心理学のヤーン・ヴァルシナー氏（オールボー大学）を招聘し、連続公開講演会（立命館大学、東京大学共催）、及び、日本心理学会第77回大会（19日）でシンポジウムを行った。10月から11月にポール・ペーター・ファーベーク氏（トゥエンテ大学）を招聘し、立正大学で講演会（10月31日）を、国際応用倫理学会（北海道大学）で講演会とワークショップ（11月1、2日）を行った。2月27日から3月7日にかけて、フェミニスト現象学のリサ・シェル氏（リンショーピン大学）を招聘し、大阪大学（共催）と立教大学で連続講演会を行った。

③5月の国際理論心理学会（サンチアゴ、チリ）では河野、森が、7月の国際生態心理学会（エストリル、ポルトガル）では河野、佐々木、三嶋、伊藤などがそれぞれこれまでの成果を発表した。また、9月の日本心理学会大会（北海道大学）2つのシンポジウムで共同参加を行った。

④10月に立教大学で研究例会を行い、桑子、川内が報告をした。3月末には、晴海グランドホテル（東京）で、研究分担者、共同研究者の24名が参加し、今年度刊行された3巻のアンソロジーの合評をし、第二のアンソロジー編纂に関する共同研究について議論し、グループ分けを行った。

⑤フィールド調査として、桑子は佐渡島や宮崎県で生態系改善活動を行い、川内は東日本大震災の仮設住宅に関する調査報告をした。

(3) 三年度は、二年度に刊行した『知の生態学的転回シリーズ』（全三巻）（東大出版会、2013年）の研究成果を踏まえ、第二段階として、以下の5つのテーマを立て、グループに分かれ、現象学と生態心理学、風土学、建築学、看護学、障害学、発達心理学などの各実証科学をより緊密に連携させ、学際的な研究と実践を行った。

①「まちの技能」グループでは、特定の場所の持つ一群のアフォーダンスと人間の能力が、技能としてどのように実現されるかを明らかにするための研究を行った。

②「超越のアフォーダンス」グループでは、脱エコロジカルな超越領域をエコロジカルな観点から捉え直す試みをした。

③「私と私」グループでは、環境をめぐる、複数の人間が主体としてかかわり合うことによって生じる現象をエコロジカルな観点から追求した。

④「感覚の世界」グループでは、感覚に関する哲学や科学の見地を広く考慮しつつ、身体感覚に一種の特権性を与える観点から感覚世界の全体像を描き出した。

⑤「移動の未来」グループでは、移動、拡張、地図、ヴィスタ、引っ越しなど移動に関わる現象を生態心理学の観点から追求した。

また、それらの活動と並行して、国内外での学会発表を50件以上、論文・著作の発表を30件以上行い、8月には、生態心理学を専門とするウィットハーゲン氏（グローニンゲン大学）を、3月にはと心の哲学を専門とするオバゴー氏（コペンハーゲン大学）の二人の研究者を招聘し、連続講演会、ワークショップを行った。

(4) 四年度は「まちの技能」「超越のアフォーダンス」「私と私」「感覚の世界」「移動の未来」のグループが、2016年のアンソロジー出版に向けて、それぞれ研究を推進した。

本研究全体の企画としては、次の活動をした。

①5月17日に、日本哲学会ワークショップ「個人と生命」を、フランスからレヴィ氏、韓国からキム氏を招聘し、日本近代思想の中にフェミニズム的な身体論と生命観の系譜を検証した。9月23日には日本心理学会の公募シンポジウム「ニッチ構築としての知と技能の発達」を実施し、生態心理学に詳しい心の哲学者であるR・メナリー氏（マクレアー大学）を招聘し、本研究分担者三嶋、森、河野が登壇した。

②6月20、21日には「京都カンファレンス：拡張した心を超えて：異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髓」と題した大規模な自主シンポジウムを開催した。このシンポジウムは、自民族中心主義、男性中心主義、人間中心主義的な心と自己の概念を乗り越えて、代替概念を提案することを目指したもので、4つのセクション、2日間にわたって活発な議論がなされた。心の哲学の第一人者ショーン・ギャラガー氏（メンフィス大学）をメインのゲスト・スピーカーとして招聘し、国内からは、本研究分担者、協力者8名に加え、ロボット工学、身体性の発達心理学、東洋の身心論、ジェンダー問題とマイノリティの身体論の専門家15名が登壇した。2016年2月に、第二回日蘭技術哲学ワークショップを共

同開催した。技術哲学・技術の現象学の第一人者であるP・P・フェアベーク氏（トウエンテ大学）と共同し、日蘭の研究者約25名でワークショップを行った。研究分担者の直江らが参加した。

③7月の国際生態心理学会（ミネソタ大学）では、研究代表者の河野らが研究発表した。他にも精力的に国内外で研究発表を行った。

(5) 最終年度は、これまでの理論的基礎の探求から一歩進め、生態学的な知の発想の市民的・社会的還元を目的とした研究を行った。特に、生態心理学的発想のもと、私たちが日常的に行う実践、さらには社会集団的に行う実践を記述しなおし、望ましい生の形成の展望を目指した。

第二の共著『日常生活のなかのエコロジカル・ターン』の出版に向けて、以下のグループに分かれて、研究例会を繰り返した。

①「場所をつくる」グループは、まちの全体と部分のさまざまなスケールにおいて、人間と場所がどのように相互作用し、その結果としてどのような技能が生み出されるのか、あるいは、生み出すことが可能かを生態心理学を駆使しながら探求した。

②「移動する」グループは、私たちが生活している場所における移動および発達について取り上げ、環境における人の行為を、時間的・空間的スケールで生態学的に考察した。

③「感覚する」グループでは、感覚の世界の正常さとそこから逸脱と考えられているあり方に注目し、そのようなあり方が多次元であることを明らかにし、生態学的現象学の観点から解明を目指した。

④「他者と結ぶ」グループでは、主体-主体関係を障害、看護、教育、体験伝承、ロボティクスなどに発見し、その発生や様態、「私」同士の相互作用を探った。

⑤「よく」そして「よく」行う」グループでは、生態学的な立場から、「すべき行為」が行われているときに利用されている周囲の特徴と、相互行為の変容特徴を取り出し、規範倫理との差異と連続性を考察した。

また、以上の研究と並行して、これまで通り国内外での発表ならびに論文・出版物の刊行を多数行った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Masato Sasaki, Tetsushi Nonaka, The Reciprocity of Environment and Action in Self-Righting Beetles: The Textures of the Ground and Objects, and the Claws, *Ecological Psychology*, 査読有, Vol. 28, 2016, pp. 100-125

DOI:10.1080/10407413.2016.1163983

- ② Hiroaki Ishiguro, How a young child learns how to take part in mealtimes in a Japanese day-care center: a longitudinal case study, *European Journal of Psychology of Education*, 査読有, Vol. 31, No. 1, 2016, 13-27  
DOI:10.1007/s10212-014-0222-9
- ③ 伊藤万利子、三嶋博之、佐々木正人、けん玉熟練者における視覚情報の探索過程、*認知科学*、査読有、21巻、2014、325-343
- ④ 熊谷晋一郎、一般大学生における聴覚過敏の実態とリスク要因、*AUDIOLOGY JAPAN*、査読有、56巻、2013、234-242
- ⑤ 三宅泰亮、山地雄士、大島直樹、デシル バラビンドラ、岡田美智男、*Sociable Trash Box: 子どもたちはゴミ箱ロボットとどのように関わるのか*、*人工知能学会誌*、査読有、28巻、2013、197-209

ほか 109件

[学会発表] (計5件)

- ① 柳澤田実、ポストモダン思想と平和実践: 目的を定めないことの可能性、日本平和学会、2016年6月26日、東京女子大学(東京都世田谷区)
- ② 染谷昌義、エコロジカル・ターンのゆくえ-4E (embodied, embedded, enactive, extended) に ecological がはいらないのはなぜ?、東北哲学会第65回大会、2015年10月24日、福島大学(福島県福島市)
- ③ 直江清隆、技術的経験の現象学、哲学・思想学会、2014年11月16日、筑波大学(茨城県つくば市)
- ④ Junichi Murata, What can we learn from FUKUSHIMA: The multi-dimensionality of technology, symposium Technology and Environment, in World Congress of Philosophy (招待講演)、2013年8月6日、The University of Athens, Athens (Greece)
- ⑤ Naohisa Mori, The third accountability shows signs of 'being experiencers': A contribution to forensic psychology, the 30th International Congress of Psychology, 2012年7月25日、Cape Town International Convention, Cape Town (South Africa)

ほか 207件

[図書] (計5件)

- ① 河野哲也、水声社、いつかはみんな野生にもどる、2016、274
- ② 川内美彦、前田有香、日本財団パラリンピック研究会、障害のある人にとっての競技場のアクセシビリティ-観客として、競技者として-、2015、113
- ③ 萱野稔人、小川仁志、講談社、闘うための哲学書、2014、398

- ④ 桑子敏雄、岩波書店、生命と風景の哲学、  
2013、270  
⑤ 岡田美智男、医学書院、弱いロボット、  
2012、213  
ほか 85 件

[その他]  
ホームページ  
<http://ep.human.waseda.ac.jp/groups/ecorex/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

河野 哲也 (KONO, Tetsuya)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：60384715

### (2) 研究分担者

村田 純一 (MURATA, Junichi)  
立正大学・文学部・教授  
研究者番号：40134407

佐々木 正人 (SASAKI, Masato)  
東京大学・大学院教育学研究科 (教育学部)・教授  
研究者番号：10134248

桑子 敏雄 (KUWAKO, Toshio)  
東京工業大学・リベラルアーツ研究教育  
院・教授  
研究者番号：30134422

川内 美彦 (KAWAUCHI, Yoshihiko)  
東洋大学・ライフデザイン学部・教授  
研究者番号：30527932

岡田 美智男 (OKADA, Michio)  
豊橋技術科学大学・工学 (系) 研究科 (研  
究院)・教授  
研究者番号：50374096

直江 清隆 (NAOE, Kiyotaka)  
東北大学・文学研究科・教授  
研究者番号：30312169

長滝 祥司 (NAGATAKI, Shoji)  
中京大学・国際教養学部・教授  
研究者番号：40288436

伊藤 精英 (ITO, Kiyohide)  
公立はこだて未来大学・システム情報科学  
部・准教授  
研究者番号：90325895

森 直久 (MORI, Naohisa)  
札幌学院大学・人文学部・教授  
研究者番号：30305883

萱野 稔人 (KAYANO, Toshihito)  
津田塾大学・学芸学部・教授  
研究者番号：20422371

三嶋 博之 (MISHIMA, Hiroyuki)  
早稲田大学・人間科学学術院・教授  
研究者番号：90288051

柳澤 田実 (YANAGISAWA, Tami)  
関西学院大学・神学部・准教授  
研究者番号：20407620

熊谷 晋一郎 (KUMAGAYA, Shinichiro)  
東京大学・先端科学技術研究センター・准  
教授  
研究者番号：00574659

染谷 昌義 (SOMEYA, Masayoshi)  
高千穂大学・人間科学部・教授  
研究者番号：60422367

石黒 広昭 (ISHIGURO, Hiroaki)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：00232281

### (3) 連携研究者

柏端 達也 (KASHIWABATA, Tatsuya)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号：80263193

### (4) 研究協力者

佐古 仁志 (SAKO, Hitoshi)  
立教大学・兼任講師

國領 佳樹 (KOKURYO, Yoshiki)  
立教大学・兼任講師

宮原 克典 (MIYAHARA, Katsunori)  
ハーバード大学・日本学術振興会・特別研  
究員

GALLAGHER, Shaun (University of Memphis,  
USA)

ROY, Jean Michel (Les universités, École  
Normale Supérieure de Lyon, France)